



宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

20世紀最後の年	玉井 理
国際協力の地方展開と経験の継承	伊坂 潔
会員の現地報告シリーズ4 アルゼンティンに想う	原田 宏
口蹄疫病にちなんで	吉山 武敏
ある難病患者の国際会議参加	玉井 理
こんばんは、ハノイのさえきです。みなさんお元気ですか	佐伯 雄一

20世紀最後の年

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

会長 玉井 理

20世紀最後の年を飾る催しとして、昨年4月には太平洋島サミット、7月にはサミット外相会議と国際的に重要な会議がこの宮崎の地で開催され、成功裡に終わりました。宮崎県では、この成果を足がかりに更なる国際的な展開にむけて歩を進めています。会員の皆様も、それぞれ、いろいろな場面で、協力、貢献をしてこられたことと思いますし、これからも一層の協力が期待されていることでしょう。

地域の国際的な活動が活発に行われる中であって、会員の皆様は、それぞれ国際的な活動に参加される機会が増えていることと思います。ところで、当連絡会の組織としての活動ですが、ご存じの通り、従来、九州国際センターにお願いしていた運営事務を、今年度から、連絡会独自に事務運営をしていくことになりました。初年度と言うこともあり、組織としての活動が十分に行えなかったことを反省しています。

なお、連絡会の大切な役割として、会員への情報の速やかな提供があります。定期刊行物としては、国際協力事業団からのフロンティア、協力隊を育てる会からのクロスロード、宮崎県国際交流協会から

のSouth Wind等の冊子がありますが、今年度は、身近な速報的な国際的活動に関する情報源として宮崎県内の国際交流団体の連絡ネットワーク(e-miyazaki)に参加しました。このネットワークでは加入者間のメール交換が平均1日に10件ほどあります。会員の皆様に、これらで得られた情報をFAXまたはE-mailを使ってできるだけ速やかにお届けし、皆様の国際交流・協力活動のお役に立てたいと思っています。

今年度は、宮崎県関係者がJICA専門家として12名も派遣されました。内、2名が帰国され、現在10名の方が現地で活躍中です。年間派遣者数としては過去最高ではないかと思えます。これらの方々が帰国され、当連絡会に新たな息吹が注入され、活動がさらに活発になることが期待されます。

来年度は、中央連絡会が開催される予定です。全国各県の連絡会活動状況についての情報を入手し、今後の連絡会活動の参考にしたいと思います。会員の皆様のご協力により、21世紀の宮崎県JICA派遣専門家連絡会の活動がますます活発に行われることを願っております。

国際協力の地方展開と経験の継承

国際協力事業団九州国際センター

所長 伊 坂 潔

宮崎県JICA派遣専門家の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、宮崎県におきましては、昨年4月には太平洋島サミット、また7月にはサミット外相会議などの重要な会議が開催され成功裡に実施されたことは、記憶に新しいところですが。この様な大きな成果の上に立って、今後県の国際的な活動をどのように進めていくかいろいろな方々が検討されていることと申します。

九州各県の国際的な活動を見ると、友好都市との交流等を主体とする国際交流から、国際協力へ重点を志向していこうとする傾向があると見受けられます。各自治体、地域住民の方々も、国際的な活動をより実のあるものにしたい、また地域社会にも何らかの形で意義のあるものにしたいといった熱意の現れではないかと思われまます。

宮崎県におきましては、既に海外からの技術研修員の受け入れを拡充していこうとするなど、既に国際協力を重視していこうとする方向にあると思われまますが、こうしたなかで、既にJICA専門家の方々はいろいろな国、いろいゝろな分野で技術移転等に携わってこられた中で、貴重な経験をお持ちでおられるので、地域の国際協力推進に助言したり、実際に

携わったりする機会も多くなるのではないかと推察されます。

さて、JICAにおいては、国際協力の地方展開が主要課題のひとつとなっており、九州国際センターとしても、地方自治体、大学機関、NGOと連携協力しながら地域の特色ある研修コースの開発、青年海外協力隊等ボランティア事業の推進、開発パートナー事業の実施など国際協力を地域に根をはったものにすべく活動を続けております。

また、次の世代に国際協力の経験を引き継いでいくことも重要と考えており、そのため教育現場における国際理解教育および開発教育も重要と考えております。

このように宮崎県における国際的な活動の方向とJICAの目指す方向は同じベクトルを向いており、今後具体的な案件として、どのようにまとめていくかが当面の課題といえます。

このような状況の中で、派遣専門家連絡会の皆様より、国際協力の地方展開に対するご助力、あるいは実際のお力添えを賜り、是非実のある国際協力の推進にご支援、ご協力いただくようお願いいたしますと存じます。

会員の現地報告シリーズ4

アルゼンティンに想う

宮崎大学農学部 原田 宏

1999年10月から約3ヶ月、そして2000年8月から約1ヶ月、国際協力事業団のプロジェクト（「肉用牛の産肉能力改良」を担当）で、アルゼンティンを訪れる機会を得た。南米への旅は一昨年が初めてで、期待と不安を抱きつつ13:30、宮崎空港を発ち、羽田経由で成田に向かう。2時間足らず休憩の後、夜9時前、成田を発って最初の寄港地Los Angelesへ約12時間の飛行。Los Angeles空港の待ち時間（2時間足らず）に、煙草を吸い溜めし、再び機内へ。次の寄港地Sao Pauloまで約11時間の飛行。ビジネスシートでもなければ大変な旅である。Sao Pauloでは、日系の係員の指示で、あちこちに振り回され、ろくに休憩も取れぬまま、アルゼンティン航空のB763で約3時間、やっとの思いで着いたと思ったら、着地寸前で上空へ。2度目で、無事Buenos Aires空港に着陸し、出迎えを受けたのが、もう14:30、宮崎を出てからなんと36時間ほどをかけて、地球の裏側にたどり着いたことになる。時差は丁度12時間で、日本の半日前で時計の針を回す必要がない。逆といえば、アルゼンティンは、夏を迎えようとしており、周りは、もう、ほとんど半袖姿である。

翌朝、長期滞在員の方の案内で、地下鉄とバスで大学へ。地下鉄は、4線あって、ホテルから大学方面は、街の中心を走る1本目の線に乗って2つ目の駅で2本目の線に乗り換え、終点のFederico Lacroze（皆は“チャカリータ”と呼んでいる）まで行く。地下鉄の終点チャカリータには、Buenos Airesで最も古く、かつ、大きい墓地があり、そこには、アルゼンティンタンゴの大御所カルロス・ガルデル（1935年死亡）の墓と像もあって、何でも、俳優や有名人はこぞって此処に埋葬されることを望んでいるとのことである。そのチャカリータから、バス（111番／自分の宿泊所となっているホテルの近くから約50分かけて走ってくる）で約10分で農学部に着く。Buenos Aires大学は、まったくの蛸足で、農学部以外はほとんど市内の中心に近いところに点在し、まとまったキャンパスはない。大学で、日系

の学科長から、スタッフに紹介されるが、当然のこととして、ほとんど記憶に止まらない。とにかく、女性スタッフが多く（約半数）、日本の場合の女性に対する閉鎖的な環境が目立った。

ちなみに、Buenos Aires大学は、かつてはアメリカ全体で、最も規模が大きかったとかで、農学、獣医学、理学、自然科学、工学、医学、薬学、歯学、建築（設計）、法学、社会学、経済学、心理学、哲学・文学の14学部がそろっている。

学生のクラブのようなものはないが、外国語会話（ロシア語・日本語など）、ダンスホール、スポーツ施設などを学部によっては併設しており、学生は、格安で利用出来るそうだ。一般市民も、少し高いが利用できるのが良いと思った。

短期間の滞在ではあったが、初年度でかなり吸収させてもらったことに今もお感謝している。ほんの一端をご紹介しますと、次のような一日がある。

朝、ホテルで8:00にピックアップしてもらい、高速道路を使って約1時間半、Buenos Aires県の一角にある公営の肉用牛セリ場（Centro de Consignatarios de Productos del Pais）に着くと、既に集められた出荷の牛が、民間の仲買人ごとに区切られたパドックに入れられていた。なんと、1日のセリ頭数が、9,000頭（この日は、9,234頭）を越えるのである。品種、年齢、体重等は様々で、肥育牧場によってそれぞれ肥育システムが違うよう



Buenos Aires農学部の情景

である。品種は、ヘレフォード、レッドアングス、ブラックアングス、リムージンなど欧米でよく見られるもの、ごく僅かだが、亜熱帯向きのブラーマン、そして、これらの交雑種が、馬に乗った公営場の作業員や家畜商に追い立てられて、体重クラスごとにパドックに納められていく。その馬さばきの作業は、実に鮮やかで見ていて全く飽きない。

1日の集計データから見ると、肥育終了月齢は、1歳の小さなものから26-28ヶ月の大きなものまで数段階に分けられているが、20ヶ月前後のものが多い。頭数も、去勢牛(体重：300-600kg：平均460kg/350kg、37.6%)が、最も多く、続いて雌(1歳以上、体重400-500kg：平均450kg、20.6%)、若雌(離乳-1歳、体重200-300kg：平均300kg、17.8%)、若雌・雄(離乳時、体重200-250kg：平均230kg、7.4%)、雄(2歳以上、体重570-700kg以上：平均630kg、3.0%)と、順になっている。

全体で見ると、9,108頭の全体の体重が3,658,910kg(平均402kg)、総購買価格\$2,501,049.960(kg体重当たりの平均価格=\$0.683)ということであり、1kg当たり約70円あまりという安い値段で生体売買がなされていることになる。農家が、収益が少ないために牛離れしているのは当然のこととも考えられる。消費者が一人当たり、年平均で約60kg(1998年)もの牛肉を消費しているのも、このように安いからであろう。そのため、肉用牛の改良に経費や労力を

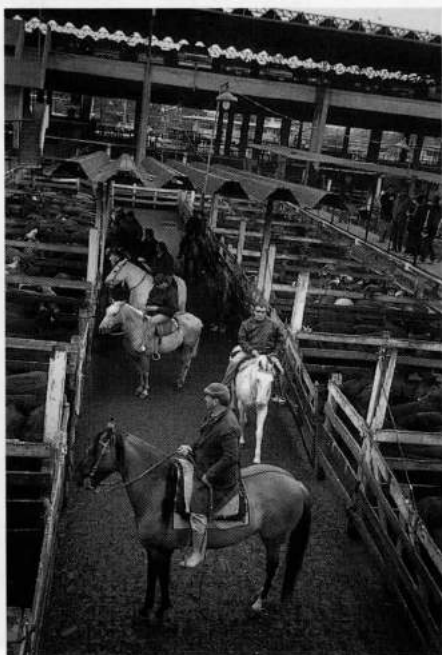
注ぐことが困難になっているのが現状である。

大学の付属牧場も日本とは違って、かなりの頭数を抱えた生産牧場で、かつ、キャンパスと離れていることもあって学生の教育には余り利用されていない。驚いたのは、とにかく遠いことで、丁度、宮崎大学の付属牧場が、福岡に在るといった位置関係である。そこに測定調査で行くことになった。

朝7:00ホテルを立ち、信じられないほど安い高速道路を順調にひた走り、1時頃ガソリンスタンドで昼食をとる。アルゼンティンスタッフは、少し走り始めてから、用意していたマテ茶を飲み始める。此方の常備品で、町の何処彼処に用具を売っている。もちろん土産品売り場には必ずある。ガソリンスタンドにもマテ茶用に、無料のお湯のタンクを用意しており、上手くできている。やがてアスファルトの高速道路を抜けて、雨でぬかった赤土の道路に入った。「牧場は、もうすぐか」と思って聞くと、「いやいや、こんな道を50km走る」といわれてびっくり。とろとろ、時にはダッチロールしながら、牧場に着いたのは、15:00過ぎ。長旅に疲れたが、それを吹き消してくれるようにすばらしい場所であった。

コーヒを飲んでから、翌朝からの測定現場を確認し、場内を見せてもらう。牧場は、かつてのフランスから移住した富豪が持っていたものをそっくり大学に寄付されたものということで、今も調度品など大切にそのまま使っている。当然だが、昔は自家発電でやっていたらしく、その重機もそのまま残されていた。

牧場の広さは、約3,000ha、牛は、肥育のみで約1,700頭、すべて、経営主体で、実験牧場ではなく、学生実習も、1泊のみの見学実習ということである。



肉用牛セリ場の様子



大学牧場の本館

技官7名と炊事等のおばさんが1人。牛追いなど大変な作業のようであるが、みんなそれを感じさせないくらいに素晴らしい。

民間の牧場にも測定に出かけたが、少し様子が異なっている。そこの初代の人はフランスから移住し、1923年この地に牧場を開いた。大学の付属牧場も同様、地盤が低く、かつ、砂地のため開拓には相当苦労したと考えられる。牧場を現在の姿に完成させたのは2代目の人のようであるが、その人の家は、牧場の事務所（本館）の直ぐ近くにあり、今はもう空き家になっているが、外から見る限り今の家以上の立派な館で、チャペルまで建てられている。本館事務所内には、肉用牛の品評会で受賞したカップがずらりと並べられている。年代を見ると、1941年のものが一番古いようで、牧場を築いて18年かかってトップに辿り着いたことになる。また、1958-1960にショートホーン種（イギリス原産）の部門で、3年にわたる功績に大きなカップが与えられているようで、当時は色々と品種も異なっていたようである。

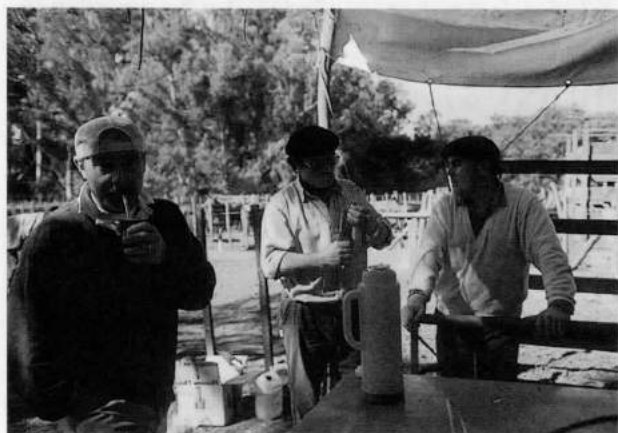
3代目の人（現在のオーナーの父親）は、息子の家を建て、Uruguayにいた女性と結婚し、一人っ子の息子を育てながら、数々の業績を継承し、現在の姿の牧場を築いて頑張っていたが、6-7年前、約60歳くらいの、牧場主としては、まだ若い年齢で病死し、当時、Secondary schoolに通っていた20歳の息子が急遽父親の後を引き継ぐことになったわけである。息子は、通常は、母親と一緒にBuenos Airesで生活し、事務所の本体もそちらにあって取引等の仕事はそちらでやっており、月に2-3回、アウディをすっ飛ばして（片道3時間半）、牧場に来て1週間（月一金）現場の事務を行っている。

牧場の規模は、総面積：3,500ha、総勢12-13人で経営している。事務管理はすべてコンピュータを使ってこなしている。家畜は、まず肉用牛が総頭数3,700-3,800頭で牧童(Gaicho)3人が世話をしている。それに1996年から始めた豚が約600頭おり、これをGaicho1人で世話をしている。かつては、羊も飼っていたが、飼料畑を食い荒らすので、減らし、現在は、家畜としてではなく、家のそばに2頭のみ繋がれている。そして、トウモロコシ（主に食用油、一部家畜の飼料用）、麦（ほとんどパン製造用）、その他の食物、アルファルファ、イタリアンライグラス、パルミレット、その他の飼料を作業員3-4人でやっている。日本人の勤勉さなど吹き飛びそうである。

感心したのは、機械関係の作業員2-3人がほとんど総ての機器を牧場内で製造・修理しており、かつ、電線を引いて電気を買うより、灯油の方が安いので、ドイツ製の自家発電機を使っている。スクラップの多い日本は見習うべきことが多い。

牧場内には学校もあって、作業員の子ども達はそこで勉強をしている。先生は、町から毎日やって来る。基本的には、牧場のオーナーが給与を支払うのだが、現在では、国の援助も半分くらいあるそうだ。実に上手くコントロールされているし、かつ、全員が、何をすべきかを理解し、協力し合っているかがよく判る。また、機材をとことん修理し、無駄な経費を節約している点は、もっともっと日本人は学ばなければならない。

読んでいただくには、退屈な話が多くなってしまいました。こらで、アルゼンティンの紹介をいたしましょう。



マテ茶を飲むスタッフ



牛体を測定するスタッフ

まず、アルゼンティンの乗り物について：

市民が最も多く利用しているのはバスである。自転車やオートバイはそれほど多くは見かけない。バスが安いことと、どんな細いところへでも隈無く走っているように感じられるほど便利なことと、自転車などは取られやすいことが、原因であろう。Primary schoolへも、赤と白の専用の懐かしいフロントエンジンのバスが送り迎えしている。

さて、一般のバスに乗るのは大変である。道路狭しとバス同士が、まるでカーチェイスのように抜き合い飛ばし合いで、まるでダイヤなど関係なく同じ系統番号のバスが2-3台、それも抜き合いしながら走っていることはしばしばである。終点についても休む間もなく直ぐに出る。これに乗るには、大きく手を挙げて意思表示しなければ、停留所に立っただけでは絶対に止まらない。時には、手を挙げても行ってしまう。降りる人も大変、何せ、完全に止まらないこともたびたびなので、特に老人にとっては、困った乗り物である。道理で、あまりお年寄りには乗っていない。運賃は、大学まで約1時間乗って0.7ペソ（1ペソ＝1米ドル）、通常0.6ペソであり、乗ったとき運転手に、「0.7ペソお願いします」と自己申告して器械にコインを入れる仕組みである。もちろん行き先を云ってもよい。

もう一つの乗り物は、A-Dの4線のルートを持つ地下鉄である。これに乗るには、1回0.6ペソの専用コインを改札口に入れれば、後はどのように乗ろうと、乗り換えようと自由である。また、各線は色分けがしてあって非常にわかりやすい。使っている車両はドイツや日本（B線の赤い丸の内線のもの）のものである。「車掌室」などの文字を見て、思わず微笑んでしまう。

これら二つの乗り物で、今回初めて見た興味深いものがあった。走っている車両の中で、突然どこからともなく乗ってきたものが、ものを売ったり、演説をぶってお金を徴収したり、はたまた本当の子ずれの物乞いが乗ってきたりと様々である。彼らは、乗車賃無料で、公認されているようであるのがまた、おもしろい。何とか、写真に撮りたいと思うが、かなり勇気がいりそうだ。

タクシーは、すべて黄と黒のツートンカラーでまるで蟻のように多く走っている。ほとんど、客のな

い車は、とろとろ運転で、タクシーの前を横切る人はざらである。これまた、かなり安い、何処の国でもあるように悪質な運転手も多い。

その他国鉄が、いくつかの線で走っているが、国が広いので、県間の移動となると、車か、飛行機ということになる。もちろん、20時間以上も乗る長距離バスもあるが、利用するのにセンターまで行かねばならず、やや不便である。

アルゼンティンの首都Buenos Aires（美しい空間とでも訳すか、かつては、アメリカ大陸のパリと云われたそうである）は、気候的にも宮崎とよく似ている。もちろん、季節は正反対であるが、植えられている植物もよく似ている。少し珍しい木を紹介しましょう。

アルゼンティンを代表する木：

まずは、公園などで大きな木陰を作ってくれる、エンタシス状の常緑樹、オンブー（Ombu）。楠に似た葉を持ち、大木のように、植物学上、実は、“木”ではなく茎のようなものである。Onbuと同様、公園や街路樹として植えられて、10月の初め頃、春から夏にかけて大木に拳ほどの真っ白な綿のような花を咲かせ、その中に1つずつ小さな黒い種を残して落ちるパロ・ボラッチョ（Palo Borracho）。丁度、杖（Palo）を突いた酔っぱらい（Borracho）が、群れなしているようにも見えてその名が付いている。所変われば、見方も大いに違うようだ。そして、ラパチョ（Lapacho）とって、10月の中頃から、若葉が出る前の裸の木に、濃いピンク（黄色もある）の花をいっぱい付けて、日本の桜を思わせるほどにとっても美しい木が街のあちこちに植えられている。私がとても気に入ったのは、ハカラランダ（Jacaranda、沖縄や宮崎にも持ち込まれていて、ジャカラランダと呼ばれている）である。Lapachoと同じく、裸の木に濃いブルーの花を10月の終わり頃から付け始める。並木のようにして植えられていることが多く、咲き始める頃は、もうハカラランダの並木に吸い込まれていきそうになる。

土曜や日曜は町中の美術館や骨董屋街を訪ね歩くことが多い。

ホテルから、小一時間街中を散歩すると国立美術館（Museo Nacional de Bellas Artes）がある。

入るとマネ、モネ、ゴッホ、レンブラント、ゴヤ、ルーベンス、ベラスケス、ルノアール、ドガ、など沢山の所蔵点が一階に展示されていて、これは大いに楽しませてくれた。2階に上がると“Paul Klee”の特別展示会をやっていて、他にアルゼンティンの画家の作品も多く展示されていた。スペインのマドリーもそうだが、これだけのものを総て無料で見せてくれるのだから有難いものである。遠くまで来た甲斐もあるというものだ。

アルゼンティンといえば、少しはタンゴも紹介しておきましょう。Buenos Aires市の北西、タンゴ発祥の地ボカ(BOCA:カミニート)は、特別目を引くほどの所でもなかったが、かつては栄えたと思われる漁港の面影を川岸に残す、それなりの風情がある。昔は、主にイタリー系の移民が多いところであつたらしく、今もその名をとどめていて、いわゆるアルゼンティン風ではない街並みである。“BOCA”の一部を取り囲むように、明らかに貧しさを隠せないままの家々が、廃墟になった工場と入り交じって地盤の低い住宅街を作っている。底辺の人々のエネルギーの結晶のような、フットボールスタジアム“BOCA Junior”が、大きな構えを見せており、周辺では、黄色と紺のトレードマークのシャツに身を包んだ子ども達が、サッカーに熱を燃やしている。

エネルギーなこのBOCAの街で産まれたタンゴの神様のように親しまれているのが“Carlos Gardel”である。

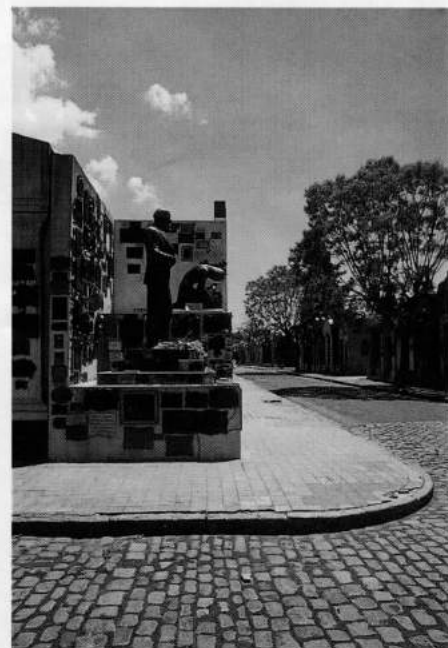
アルゼンティン随一のチャカリータの墓地に眠るCarlos Gardelの墓を見たいと思っていたので、地下鉄で行ってみた。12時を少し回ったくらいに着いたが、結構花を持ってお参りに来ている人がいる。面白いことに、墓の門をくぐって中に入っても“Calle(通り)”の標識があつて、車で墓の直ぐ側まで行けるようになっている。墓も、それぞれ一戸建ちの家のように大きく、ミニ住宅街といった雰囲気、ヨーロッパなどで見る、いかにもお墓という雰囲気は、添えられている花のみが示しているようである。奥の方は、これから、まだ拡張していくようで、地下2階までに渡って、埋葬スペースが設けられている。日本でも都会ではミニマンションの

ような墓があるが、もっと大きなスケールで設けられている。ただ、地表近くには、昔のことだから、遺体のまま眠っているわけで、何とも奇妙な気がした。

老人にCarlos Gardelの墓を尋ねて、教えられた方向に行くと、丁度管理人の人が居て、丁寧に教えてくれた。雰囲気からして、大勢の人が尋ねてくるらしく、手のひらを見るような正確さで、かつ、墓所にいることを忘れさせるような笑顔がよかった。

墓の前に行くと中年の婦人がGardelの立像にびったりと寄り添って動こうともしない。写真を撮っているところへ、別の婦人2人づれがやってきて、たばこに火を付けて備えて行った。初めの婦人は立ち去る気配もなく、そのうちうち解けて、話していると、彼女も昔からのファンで(Gardelは1935年に亡くなっているから、映画やレコードを通してのことだろう) 其処に並んでいるファンからのプレートに混じって、Gardelの足元に張られている彼女のプレートを示してくれた。いつも其処に立ち寄っているという言葉通りよほどのファンなのであろう。

大草原の彼方に沈みゆく夕日が、チャカリータの墓地に佇むGardel像をいつまでも眩しく照らしていた。



チャカリータ墓地のCarlos Gardelの墓

口蹄疫病にちなんで

吉山 武敏

宮崎県に口蹄疫病が発生したとのニュースを聞いて、1972年（昭和47年）4月から1年間、農水省の熱帯農業研究センター（現国際農林水産業研究センター）の長期海外研究員として、タイ畜産開発局のパクチョン牧草試験場に派遣されていた頃のことを思い出した。

私は牧草飼料作物部門の長期海外派遣研究員の第1号で、全くタイの事情がわからず、農水省の家畜衛生試験場の海外病研究室を訪ねて現地の事情を聞いた。当時、口蹄疫病の研究については、すでに数人の研究者が派遣されており、現地の状況について詳しい情報をもっておられた。

パクチョンはバンコクから北東へ170kmはなれた丘陵地帯にあり、カオヤイ国立公園の近くにあり、試験場の敷地は800ha位だったと思う。構内の国道に最も近いところにワクチン（豚コレラ、ニューカッスル病等）研究所があり、やや離れて牧草試験場があり、口蹄疫研究所は最も奥まった所に配置されていた。口蹄疫研究所はFAOの援助で建てられ、すべてがアメリカ式であった。構内に日本の援助で建てられた宿舎があり、口蹄疫の研究で派遣された古谷武博士と暫らくの間同居させて頂いた関係で、時々

口蹄疫研究所を訪ねたが、アメリカ人向の建物で、小便器のアサガオの位置が高く、とても普通の東洋人には使えそうにもなかった。その後、日本の援助で建物も新しくなり、口蹄疫に関する研究者は連続して派遣されていた。15年後の1987年に“タイとうもろこし品質向上（発癌性物質アフラトキシンの防除に関する技術協力）”という研究プロジェクト（5年間）が開始され、JICAから派遣された5人の日本人専門家が長期滞在することになり、私はリーダーとしてバンコクに2年半滞在した。私達の研究所の隣にJICAの援助による国立衛生研究所の建物があり、日本からの口蹄疫研究者は今もパクチョンに派遣されているとの事だった。

私がパクチョンにいた頃、口蹄疫が発生すると汚染地区を包囲して周囲への感染を抑制する対策がとられているとの話を聞いたが、今回、宮崎県下に発生した時にも、ほぼ同様の手段がとられ、家畜の移動が制限され、消毒が行われたと聞いている。30年以上に亘って研究が続けられたにも拘らず、決定的な口蹄疫の撲滅には至らなかったようだ。改めて研究のむずかしさを感じさせられた。

ある難病患者の国際会議参加

玉井 理

私は3年前に神経難病筋萎縮性側索硬化症（ALS）で妻を失いました。死に至る病と向き合いながら毎日を大切に、懸命に生きる妻を介護を通じて理不尽としか言いようのないALSに対する認識を深め、そのことが、妻の死後もこの病から離れることなく、むしろ、ALSと闘う人々を支援する責務さえ感じさせ、ALS患者・家族を支援する組織、日本ALS協会の理事として、また、日本ALS協会宮崎県支部事務局長として、この難病の医療・療養環境の向上のための支援活動を続けることになり、今日に至っています。

この神経難病ALSは、運動神経が犯され全身の随意筋が衰えて、運動機能を失っていく病気で、現在のところ原因不明で、治療方法も確立されておらず、現代医学が抱える最大の難病の一つとされています。普通、発病後3～5年で全身の運動機能を失い、呼吸困難になり、生きるためには人工呼吸器が必要になります。しかし、人工呼吸器を装着すると、言葉を失い、24時間体制での介護が必要になり、家族の介護負担が極めて大きくなります（現在の介護保険ではとても十分な介護は望めません）。患者の中には、人工呼吸器を装着して生き続けることを

拒否して、死を選択する人が後を絶ちません。しかし、私は、たとえ体は動かせず、人工呼吸器によって命を維持していても、当人の生き方一つで意義ある生活ができると信じています。

日本ALS協会の会長、副会長は人工呼吸器装着患者であり、協会理事にも2人の人工呼吸器装着患者がいます。これらの患者は、協会の会議には、新幹線、または飛行機、リフト付き自動車などの交通機関によって移動、参加し、意思伝達装置補助具を使って意見を述べて立派につとめを果たしています。

一昨年日本ALS協会の全国大会で、ある患者（人工呼吸器未装着）がヨーロッパ旅行の体験報告の中で、「人工呼吸器の装着は神の意志に反するので、オランダでは呼吸器はつけない」と述べました。呼吸器の装着は勿論、当人の意志により決定されるべきことですが、できることならば、与えられた命を大切に、残された時間を有効に、明るく前向きな生活をしてほしいと思います。

昨年12月に、デンマークでALSの国際会議が開催されました。この会議に、人工呼吸器を装着して、前向きに生きることの大切さを身をもって示したい

との思いをもって、日本から人工呼吸器を装着した3名のALS患者が参加しました（この計画についてはNHKがテレビで報道しましたので、ご覧になった方もあるかと思います）。人工呼吸器を装着した患者の国際線航空機移動にはいろいろな難関がありましたが、一つずつ解決して、無事にデンマークに到着、会議に参加しました。人工呼吸器を装着したALS患者が国際会議に参加したのは初めてのことで、大変な拍手で迎えられました。3人の患者の闘病生活の発表を通じて、呼吸器を装着し、意思伝達の方法が得られ、介護者の支援があれば、立派に社会参加ができることを示し、世界各国のALS患者に生きる希望を与えるとができました。患者3人と付き添い介護役の家族、医師、看護婦、協会役員など総勢25人の大人数での参加で、経費は大変な額にのぼりましたが、国際的アピールの大きさには代え難いものでした。日本ALS協会では、近い将来、日本でのALS国際会議の開催を目標に努力しています。私も、1会員として協会の国際交流活動を支えていきたいと思っています。

こんばんは、ハノイのさえきです。 みなさんお元気ですか。

宮崎大学農学部 佐伯雄一

新居に入居してもうすぐ一週間。普通の生活を送りつつあります。

写真は部屋の中でのスナック。やせずに元気に食べてます。でもいつかかならず!!

聞いたところによるとハノイはこの数年でバイクや車が何倍にも増えたそうです。

ハノイはそのおかげで排気ガスによって空気汚染がすごいです。市街地を歩くとのと目が痛くなります。ちなみにハノイは湖が多いのですが水質汚染もすごいです。日本の生活環境の良さがあらためて身にしみます（日本の物価は異常ですが・・・）。でもいいところもあります。ハノイの人はいつもニコニコして真面目で人柄がいいです。思っていたよりも全然暮らしやすく楽しんでいます。 おわり



ご無沙汰しております。ハノイから佐伯です。

こちらに来てすでに一ヶ月経ちました。この一ヶ月の間に、ガラス器具、試薬（揃わないものもたく

さんありますが)、冷蔵庫などの調達を片づけました。徐々に実験指導に移っていかうかと考えております。そこでお願いがあります。こちらに土壤肥料関係の日本語の実験書は個人的に持ち込みました。しかし、てっきり英語の実験書の類はこちらに揃っているものと考えてた私が甘かったのです。つまり、基本的な土壤肥科学の実験書すら置いてないのです。自分で英語に訳して書き出す方法もありますがこちらでも物品調達や書類作成……………など抱えてましてちょっと手が回らない状況です。というわけで、英語で書かれた実験書があればコピーして送ってもらえないでしょうか。送付先はプロジェクト宛にお



願います。基本的なものでもかまいません。というより基本的なものの方が良いかもしれません。というのも先日、ガラス器具を調達した際、ホールピペットの使い方を知らないカウンターパートがいる状況ですので……………まだこちらの人の実力をはかりかねています。

かたや、JICAからの機材で日本の大学にもないような最新の原子吸光、炎光、ガスクロ、イオンクロマトなどが入ってまして、私の目には非常にアンバランスに映ります。急なお願いですがなにとぞよろしくお願いいたします。

(ハノイ大学に2001年2月から派遣されている宮崎大学農学部の佐伯雄一先生から玉井会長に届いたメールを、了解を得て、転載しました)

編集後記

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報・第4号をお届けいたします。

平成12年度から、派遣専門家連絡会の主体性を高める目的もあり、総会を含めてさらなる自主運営の促進が求められています。連絡会の活動がより盛んになり、創造的な活動が始まることを期待し、会員の皆様には今後ともご提案、ご寄稿いただきますようお願い申し上げます。(幹事記)